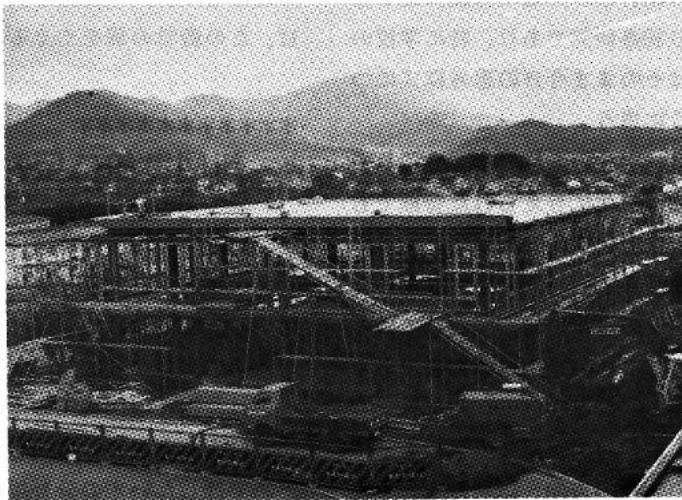




図書館だより

1979-12

— 図書館新築特集 —



建設中の図書館

図書館と人生

館長 鈴木 鳴海

長い間教室つゞきの一角に、本学の図書館は学生の研修の場として、その使命を遂行してきた。開学十有余年の歳月は、大学として設備充実の時の流れでもあった。まず体育の施設として体育館が建てられ、今度は知育の場として図書館が独立の建物として建設された。われわれが読書する場合、その効果をより高める条件は静かであること、照明が眼を疲れさせないこと、座る椅子、書籍を置く机が気持ちを乱さない型高さであることである。新しく建てられる図書

館はこれらの条件を完備している。

さてこの図書館を利用できるものは、本学の学生のみである。お互いに毎日顔を合わせている仲間が、図書館に見える。心安さというより何となく競争心をあおられ、緊張し、この緊張が読書に集中する自我を出現させる。日常、書斎などで読んでいると、時折雑念がおこり、しばしば読書が中断されるが、図書館での読書は競争意識のためか雑念がおこることもなければ、中断されることもない。今まで気付かなかった

新しい自我の発見に、ひそかな喜びを感じるものである。

われわれは長い人生の中で、図書館での読書研究は、若い時代に限られているのである。年をとると図書館通いは億劫になり、書籍店に行って、己れの欲する本を買い求めて読むことになるが、高価なものは手が出ないので自然に研究が偏ってしまう。最初のうちは気がとがめるのであるが、いつかしらん、こういう状態の中に気を沈めてしまうのである。

然しながら、われわれの知識の基底にあるものは、若い時代の読書研究であり、特に学校の図書館での生活はそのまま今日の思考様式につながっているように思う。

学校の図書館は、学生の人生の指導を蔵している。図書館生活は学生に与えられた特権でもある。長い人生の中で、この特権は時間的に限られている。この限られた時間の中に無限の知識の宝庫があり、その宝庫の扉が開かれているのである。そしてここへの出入は特権者である学生に限られている。

本学の学生は、本学の図書館での経験を基にして、それぞれの人生の方向、思考の様式を定めて欲しいのである。

次に図書館には、いろいろな本がある。漠然と図書館に入っても、これらの本が眼につく。この眼についたものの中から一寸読んでみようかなというのを借りて、読み出してみると予期もしなかった興味が湧き、知らぬ間に夢中になり、そこから新しい視野が開けて、これが動機となり新しい研究に入ることがある。図書館は実に、特に若いものにとっては不思議な誘惑的力をもっている。

われわれの人生は単純であるより多彩の方が魅力的である。この魅力に富んだ多彩の人生の緒口は、若い頃の図書館の経験に負うところが多い。

図書館は生きものである。図書館の生命力は

若ものの生きる糧である。われわれはいつも生命、特に心の糧を求めている。図書館は求めればいつもこの糧を与えてくれる。今日のわれわれの生活において、ものの生活は豊かであるが心はいつも飢えている。しかも飢えていながら求めようとせずに、時の流れに身を委せている。今こそ心の飢えを自覚し、心豊かな眼で世の中を見直すときである。

折角心の糧の殿堂が誕生したのに、この殿堂を省みずに過ごすことは、人生行路を暗くすることになる。人生行路を明るくものにしたい人は、この殿堂の扉をくぐることである。

(学 長)

新図書館に望むこと

1年 清 水 由起子

新図書館が、此度完成するにあたり、私の希望することについて少し述べたいと思います。

入学以来数ヶ月、使用してみて、まず気付くことは、現在の図書館の本の配置がわかりにくいということです。見通しがよく、入口よりひとめで探したい本の分類場所が、明確になるよう配置してほしいと思います。

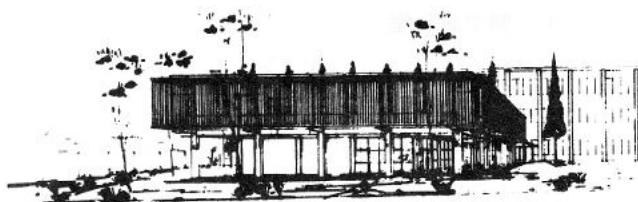
次に望むことは、図書館の使用時間の延長です。使用規定では、夕刻4時50分までですが、8時限終了後もゆっくり使用できるようにしてほしいと思います。まだ、新図書館内部の構想について発表されていませんが、もし独立した閲覧室が設けられるとしたら、できる限り開放して、気軽に使用できるように配慮してほしいと思うのです。

本について今後望むことは、小説分野を多様化してほしいと思います。現在、全集などのシリーズものが主ですが、文庫本などで多種のものを購入してほしいと思います。特に外国文学など量的に少ないと思うことがしばしばあります。私達が、日常生活で読みたいと思う本の主

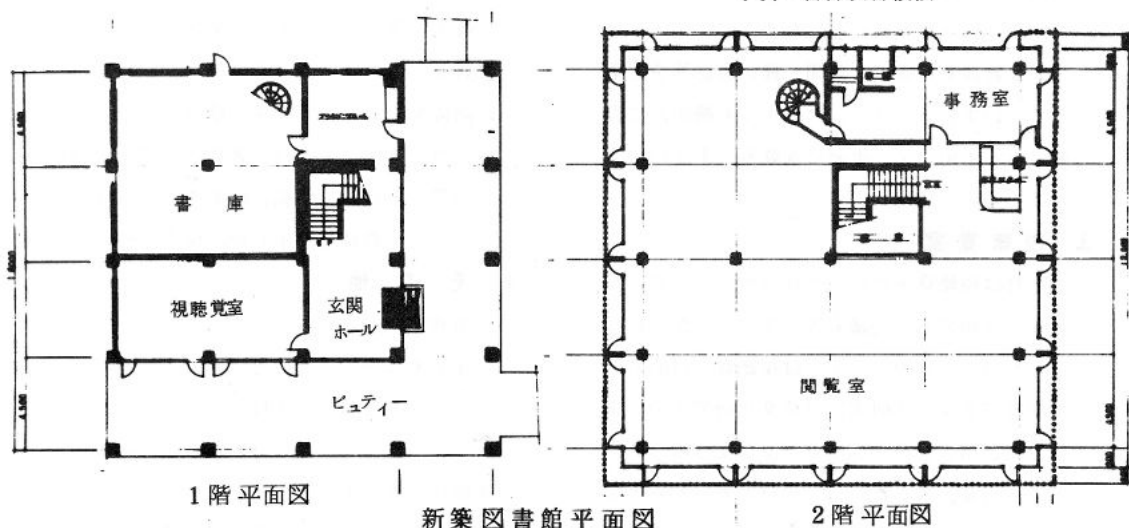
上田女子短期大学附属図書館

建築工事概要

- 工 期 着 工 / 昭和54年 9月20日
竣工予定 / 昭和54年12月20日
- 設 計 北野建設株式会社一級建築士事務所
- 施 工 北野建設株式会社
- 総工費 1億2千万円
- 敷地面積 19965.14㎡ (6039.45坪)
- 建築面積 412.04㎡ (124.64坪)
- 延床面積 736.04㎡ (222.65坪)
- 階 数 地上2階
- 構 造 鉄骨造
- 外 装 1F=アスロック厚50mm張,吹付タイル仕上げ
2F=四面アルミサッシ,屋根=カラー折板
0.8mm葺
- 内 装 壁 =ボード張,下地吹付タイル仕上げ
床 =Pタイル
天井=岩綿吸音板張



図書館完成予想図



1階平面図

新築図書館平面図

2階平面図

流は、ほとんど小説であると思いますが、現在の図書館の本が借りにくいといわれている原因は、こんな点ではないでしょうか。

今後魅力ある図書館になってゆくためには、例えば、今年試みた「アニメージュ」(アニメーションに関する雑誌)の購入などのような積極的な企画を続けてほしいのです。決して新しい本が、いいのだということはないけれども、

今の図書館の本が内容として、古くなってきているということも、見逃すことのできない現実だと思います。多方面にわたる図書館の内部、外部からの改革を望みたいと思います。一方的な要求ばかり述べてしまいましたが、図書館が上田女子短大の魅力ある特徴のひとつになってほしいと思います。

新設図書館の構成と各機能

(1) 1階

1. 玄関ホール

正門ロータリー西から入る玄関で、ドアは両開き、入った正面にロッカーを配置するので館内(閲覧室)には荷物を一切持ち込まない様にする。このことは、どの図書館でも当然のことなのだが、本学は今までロッカーを設置する場所もなかったため、習慣上、多少抵抗があるかもしれないが、規則を守って入館してほしい。

傘立ても設置される予定。(20㎡)

2. ブラウジング・ルーム(ラウンジ)

当初、設計上はW・Cになっていたが、2F閲覧室をもっとも静粛な図書館としたいために通路から一番近いこのコーナーをブラウジング・ルーム(ラウンジ)とした。このコーナーは休憩、雑談も可能で、新聞、軽い雑誌等を配架する。いす、テーブル、スツールも機能的に設備される予定。又、東側に水飲み、手洗いが2ヶ所つく。(20㎡)

3. 視聴覚室

名称は視聴覚室だが、当初計画に入っていたグループ研究室、会議室等のスペースがとれなかったため、このコーナーは視聴覚の目的の他、卒研等のグループ研究、児童文化研究等の会議、紙芝居、指人形等の演習も可能なように、窓を開け、暗幕、スクリーンをつけて多目的室となるよう設計変更してもらった。当然、視聴覚室としての機能も充分はたせる様、追々、カセット・デッキ、ビデオ装置等の機器も整備されていくものと思う。効果的な利用を期待したい。

(40㎡)

4. 閉架式書庫

ここには資料的価値の古くなった保存図書、洋書、学術雑誌のバック・ナンバー、紀要類、古新聞、不急図書、未整本図書を配架する。完

全閉架式のため入室禁止であるが、上記の諸資料を利用したい人は、カウンターに申し出て書庫へ入ることも出来る。又、将来の蔵書の増加に備え、電動式移動書架導入のためのレールが引きこまれる予定。(81㎡)

(2) 2階

1. 開架閲覧室

約400㎡の広い開架閲覧室で、四方総ガラス窓である。中央に両面二連式書架を配し、約1万冊の図書を開架配置する、自由開架式閲覧室である。

座席は80座席で、内1人用机(キャレル・デスク)20台を窓側に配置し、中央の書架を囲む形で閲覧机を配して明るく、落ち着いて読書出来る閲覧室とした。

北西側に「児童書」コーナーを設け、平机を配置する。又階段西側に「参考図書」「新書」「郷土図書」「大型本」「楽譜」「卒論」「学術雑誌」の各コーナーを設けた。

階段を上ったカウンター横は、目録コーナーとし、カードケース6台、著者名、書名、分類、洋書等の各目録を整備、配置する。事務室はカウンターと直結した東北側に位置している。

2. その他

事務室、湯沸室、ファン・ルーム、階段、書庫までもないと思う。

尚、冬期の暖房は本校舎と同じくスチーム暖房で、窓側と天井からの温風吹出しの併用で二重暖房方式である。

又、W・Cは本校舎まで歩いていくことになるが、通路から近いので問題ないと思う。

(3) 最後に

書庫も当初計画より狭く、全体として小規模な図書館ではあるが、校舎の教室の一隅に位置して10余年の図書館の歴史からみれば本学図書館として画期的な大進歩である。有効な利用を期待するものである。(司書 長張)

教育と文化と教養

渋谷 久

世界的な現象であるが、わが国でも今日、教育の重要性が強く叫ばれている。いかなる理由からであるにせよ、このことは紛れもない一つの事実である。しかし、また一たび教育の意義や目的を考えるならば、今日ほど混迷の時代は過去にはなかったであろう。教育学者はもとよりのこと、教育評論家、教育研究家と称される人びとがさまざまな意見や見解を述べ、そのために世の心ある人びとや教師はしばしば戸惑いを覚えるのが現状である。それでは、いったい教育は誰のために、いかなる目的をもってなされるのであろうか。ここで、われわれは素朴な気持ちで一度教育の原点に立ち返る必要がある。

戦前は教育と言えば、学校教育をさすのが世の大方の考えであったが、戦後は家庭教育や社会教育あるいは生涯教育などという言葉を入びとは口にし、今日ようやく、これらの言葉が内容のあるものとして定着しつつあるように思われる。教育という言葉はドイツ語では *Erziehung* であるが、この語は *ziehen* という動詞に由来する。この動詞は引き出すという意味をもつ。教育とは、元来、引き出すことなのである。それは人間の可能性を引き出すことを意味する。いかなる人間も人間としては、それぞれ固有の可能性を有する。この可能性をドイツの或る哲学者は *Anlage* あるいは *Naturanlage* という語で言いかえているが、可能性とはつまり素質のことである。素質のないところに教育は成り立たない。教育は人間による人間の教育であり、まず人間の素質に対する信頼から始まる。素質は可能性として存在する。この素質を引き出し、伸ばすことが、まさに教育の課題である。

人間はもともと自然である。身体はその端的なる現れである。しかし、精神もその始原に

おいて自然である。精神の機能は身体に即してのみ発揮される。身体を無視して精神を論ずることはできず、精神なき身体は単なる物体にすぎない。物体は物理学の法則に従うのみである。人間が自由の主体であると言われるゆえんは、人間が精神を有することにある。人間は精神と身体との統一体としてのみ、人間らしき生を享受し得るのである。それでは、このような人間はいかにして可能であろうか。ここにも教育の大きな問題がある。

私は先に教育とは人間の可能性を引き出すことであると言ったが、いかなる人間も環境を有する。しばしば人間は環境的存在であると言われる。人間は生まれる以前から一つの環境的存在として存在する。母胎が人間にとって最初にして、しかも最も重要な環境である。このことを考えあわせるならば、古来、胎教がうんぬんされるのも故なきことではないであろう。人間の有する可能性は環境からの刺激によって次第に開発されていく。人間にとって第二の環境は母胎以外の一切の存在である。人間は環境から知らずしらずのうちに影響を受けている。これも一つの教育であり、いわゆる無意図的教育である。しかし、現代社会にあっては教育はむしろ積極的な意図をもってなされる。このような教育の場の典型が学校である。いかなる学校も一定の意図と目的のもとに人間の陶冶を日ざしている。このように考えるならば、結局、人間の素質は、無意図的教育と意図的教育との融合・統一において最も理想的な姿で展開されるであろう。

さて、学校教育をはじめとするあらゆる教育において、それぞれの人間にみられる個性の伸長を図ることはもとより重要なことであるが、教育には更に一つの大きな使命がある。それは文化の伝達ということである。ここでいう文化は、人類が過去において創造した一切のものを意味し、最広義の文化である。それは自然なら

ざるもの一切をさす。すなわち最広義の文化は科学・技術・芸術・道徳・宗教など、およそ人間活動とその所産の一切を意味する。教育と文化はこのように密接不可分の関係にある。いな、教育とは文化である。文化という言葉は英語では culture である。agriculture が土地を耕すこと、すなわち農業を意味するように、culture も元来、耕作・培養を意味する。人間はもともと自然的存在であるが、文化とは人間の自然性を耕すことであり、人間の自然性の開発、すなわち人間の啓蒙を意味する。これはまさに一つの教育である。われわれが教育において目ざすのは、一つには人間の自然素質の開発であるから、教育活動は逆に一つの文化であり、文化活動である。人類の歴史がいかなる過程を経てき

人類の歴史がいかなる過程を経てきたにせよ、それはつまるところ自然から文化への歴史である。歴史の目的は文化の実現にある。文化の担い手は人間であるから、歴史の主体もまた人間である。人間が歴史的存在であるとしばしば言われ、その意味するところは極めて多義的であるが、歴史的存在の意味の一つは、歴史の主体であるということではなければならない。歴史は単なる個の問題に尽きるものではなく、種の問題であり、また同時に類の問題でもある。したがって教育や文化の問題も究極的には類の問題である。それは人類の普遍史の立場から究明されなければならないものであるが、これはあまりにも大きな問題であり、ここでは論じないことにする。

われわれはもっと身近な個人の問題をとりあげ、日々をいかに過ごすべきかを考えてみたい。今までの論述で教育と文化との関係は或る程度理解できたかと思われるので、最後に人間の教養について論ずることにする。教養のないことは悲しいことであり、恥ずべきことである。人間は誰しもが教養のある人間になり得るのであるのか。もしそうであれば、教養はそれほど論

ずるに値しないであろう。教養は culture であり先に問題にした文化も culture である。教養と文化をわれわれは必ずしも同時に考えないが、実は教養は文化であり、文化は教養である。真の教養人は文化人であり、文化人の名にふさわしい文化人は教養人である。教養を身につけることは文化を身につけることである。それには幾つかの方法があるであろう。現在社会ではあらゆる機会をとらえて教養を身につけるよう努力すべきであるが、教養を身につける基礎は何といっても学校教育にある。このことから考えても、今日のわが国にみられる高等教育の普及は、すこぶる意義の深いものであり、高等教育を享受し得る青年子女は誠に幸福である。

さて、教養を身につける最もオーソドックスな方法は、おそらく学問を媒介にした方法であるだろう。しかし、われわれが人生において必要とする学問は単なる知識ではない。とはいえ、もとより私は知識を軽蔑するものではない。学問は単なる知識の集積ではない。私がここで強調したいのは、学問が単なる知識に終わるならば、学問もわれわれも共に不幸であるということである。学問は人生において知恵にまで高められなければならない。生きた学問とはこのことをさすのである。知恵をもつには、われわれは並々ならぬ努力をしなければならない。それは自己の全人格を賭けた難行であり、苦行である。それは一種の苦悩ですらある。この苦悩を体験して初めて教養が得られるであろう。教養は誠に得がたく、それ故になお一層価値がある。教養は一挙に身につくものではない。ただ精進あるのみである。人生において重要なことは、絶えず自己を否定して、日々新たに高い自己を追求することである。 (長野大学教授)

活気あふれた保育現場を見て

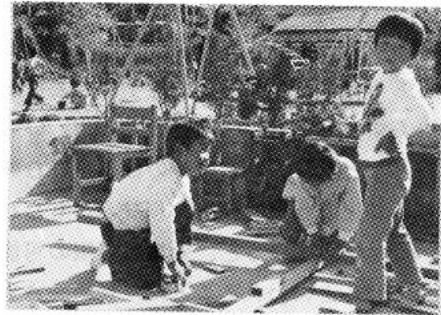
関 克彦

ここは塩田北保育園リズム室、広い部屋の中ほどに置かれた台の上には、板切れ・棒切れ・細木・竹ヒゴ・ゴム輪・段ボール箱・大小ボール箱・白ボール紙・ポリパック・まつぼっくり・どんぐり・ひも類・クラフトテープ・セロハンテープ・ボンド・釘・水えのぐ・フェルトペンその他いろいろの工作材料が山と積まれていた。

午後1時半、数十名の参観者が部屋の周囲に立って、じっと見ているなかを37名(男25・女12)の年長児が、作りかけの各自の製作物をもって入室してきた。担任の保谷野文字子先生から「これから、めいめい作りかけのものを作りましょう」という指示があって、幼児はそれぞれ作業にとりかかった。

大きな段ボール箱にハサミを入れて自分の思う形に作ったり、千枚通しで穴をあけてひもを通したり、箱の上に小箱をのせてボンドや、クラフトテープで接着したり、思い思いの製作が始まった。その活発な仕事ぶりがまず参観者に目を見張らせた。作られているものは飛行機・自動車・タンクローリー・建物・船・手さげかご・ロボットなどいろいろである。中でも金づちの音を高くひびかせ、幼児の活動がひととき活発なのは木材の飛行機作りで、幼児にもこんな大型のものが作れるのかと思わせるほどのものもあった。大勢の幼児がこれを作っているがひとつとして同じものはない。おそらくその子らしいイメージをもって作り出したものであろう。後で担任の先生にお聞きすると、木の飛行機の製作者はこのクラスの約半数に近い18名(うち2名女)とのことであった。

木の飛行機は、どれも翼と胴体の原型が作られ、これから付属の細かい部分を作る段階らしく思われた。金づち(玄能)は150gぐらいの



と300gぐらいのと二種類あって、3cmの釘打ちをするには、幼児であっても大きい方がうまく打てることは見ていてよくわかるが、子どもはそれにこだわらず、小さい方で力いっぱい打っている者も2.3見えた。また、大きい方を使っている子どもの中にも玄能の丸味のある方で打っている子は、とかく釘が途中で曲がるようだった。しかし、子どもはそれにもめげず、曲がれば釘抜き(かじや)を使って力いっぱい曲がった釘を抜いてはまた打っている。

ある子どもは鋸で小板を引こうと一生懸命やっているが、小板が動いてうまくいかない。くりかえし、くりかえしやってみるがなかなかうまくいかなかったが、これは先生の介助でようやく切ることができた。

こうして、子どもの作業はまだ終わらなかったが、公開保育の30分が過ぎたので、私たちは参観を終わった。たった30分という短い時間であったが、私はこの活気にあふれた製作指導の保育を参観して、今まで心に描いていた保育をここで始めて見た思いがして嬉しかった。同時にそれに関連してさまざまなことを思わされた。

その2.3をあげてみると、まず第1に近頃の子どもは鉛筆も削れないほど手の仕事が不得手であるとよく言われるが、塩田北の保育現場を見せてもらった限りでは、それは大人が子どもに手の仕事を与えていないからだと言わざるを得ない。この子どもは製作に熱中してわき見をしなかった。みんな自分の仕事に集中して余念がなかった。釘を打つことに全身の力を注いで力いっぱい打ちこんでいた。打って曲がれば

また全身の力をこめてその釘を抜いて、新しい釘を打ちこもうとしてあきる様子が見えなかった。いちずでおそろしいほどのこの力。いったい釘打ちなどは、力いっぱい仕事を好む伸びぎかりの幼児の心理にぴったりなのかもしれないが、これを見ていると、幼児は無限の可能性を秘めているといわれることばに疑いをさしはさむ余地は全くないと思った。だから、手の仕事ができないというのは、大人がそれを引き出してやらないだけといわざるを得ないのである。

次に、この子どもは人まねでなく、たしかに自分自身のものを製作していると見たが、子どもの創造性というものは、材料用具を豊富に提供し、それを自由に使えるように配慮した環境において育つということがある。この保育室では、材料用具が豊富で、先生はそれを自由に使わせ、自分の好きなものを作るように指導しておられる。もし、先生が材料の使い方うるさくせわをやいたり、用具の使い方についても最初から厳しいしつけをおしつけたりすれば、子どもは自由に試み、自分で発見をするものが少ないであろう。しょせん、子どもの生活は遊びである。だから、物を作るという仕上げの段階に重きをおくのではなく、豊富な材料用具の中で自由に遊ばせる過程に意味があると考えたい。

そこに始めて創造性も培われるというものである。

第3に、子どもを遊ばせ、自由に作らせるといっても放任であってはならないということである。子どもに自由に試みさせるということはいじななことである。たとえば、3cmの釘打ちをするのに軽い金づちでも重い金づちでもよい。しかし、やがてどちらがうまく打てるかを子どもに気づかせる指導はしなくてはいけないし、それを気づかせるには時機を生かした指導者の助言こそ欠かせぬものである。

また、玄能についても、打つ両端の仕組みが「凸型」と「平型」と違っており、釘打ちをするには「平型」の方を使うのがよいことは、最初から教えておくべきである。子どもは感性が鋭敏であるから、最初に先生から教えられたことは、よく理解をするし、ルールに従って作業をするにも抵抗はないものである。

さらに、子どもに自由に作って遊ばせるなかにも、配慮しておきたいことは、ひとりでもりな作業には、先生の介助とは別に、仲間同志協力し合う体制づくりをしておくこともだいじなことであると思う。

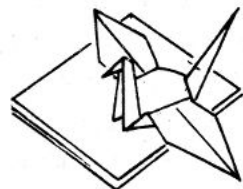
以上、2.3の感想をのべたが、最後に一言つけ加えてしるしたい。

従来、保育所の製作指導では、折紙や型紙工作が中心で、今回の塩田北のような幼児が自由に力いっぱい取り組む製作指導は、あまり行なわれなかったのではなからうか。

ただ、今は子どもの手がムシ歯になっているといわれるほど、手の働きの低下が問題になっているので、なんとしても手を使う遊びをもっとだいじにし、物の性質や法則をはだで感じ、体得し、そこで自然に創造性を培う土壌作りをしなければならないと思う。

その意味で、今回、塩田北保育園で、製作指導を大胆に行なわれた保谷野先生に敬意を表わすとともに、幼児たちの活気にあふれた製作活動を見せてもらって、私は胸のすく思いがした次第である。

(教授)



—— 英国の保育見たまゝ ——

須 永 淑

就学前教育視察のため二週間ほど英国に滞在したのは5月下旬から6月上旬の新緑の季節であった。東京学芸大の角尾稔先生、辰見敏夫先生を中心に私ども幼少年教育研究に直接関係する者ばかり13名である。主にイングランドの幼児教育の現場、その指導者の養成校、又教材や絵本や教科書等を作っている会社の研究所等を訪れたが、これらの日程は英国大使館文化部の紹介によりロンドンの教育者交流協会によって計画されたものであった。

幼児教育の姿はその国の社会や家庭生活と深くかかわって居り、文化の背景をぬきにしては考えられないものであるから、その実情を正しくとらえることは簡単でない。短期間の滞在で限られた地域で言葉もわからぬ私の見聞はその一部分にすぎないが、見たまを記してゆくしかない。英国の義務教育は5才からはじまる。5.6.7才の教育はインファントスクールと言い日本の幼稚園と小学校低学年を一緒にしたような段階である。小規模校で幼稚園の感じであり定員200人くらいまでの所が多い。5才以前即ち就学前の教育環境はさまざま、保育所に相当するものをして考えればナースリースクールやプレイグループ等があげられる。私が見たのはインファントスクール数ヶ所で附属にナースリースクールをもっているところが多かった。以下見たまの話しである。

訪問予定の学校を探してバスの運転者と通訳の日本人留学生のNさんが先刻から苦勞している。地図を見たり人にきいたり、これが日本ならどんな片田舎でも学校はすぐわかるのにこの国の学校はおよそ目立たない。道の端に小さく立札でSchoolと、それもあればいい方で何もない場合が多い。建物は大抵平屋でコンクリート

造り、低い門に広い芝生の庭で、ちょっとした事務所か町工場かという有様だ。この辺の住居は2階3階で敷地もたっぷりしているから尚のこと目立たない。もう一つの驚きは日本なら必ず聞く子ども達のワーッという声がない。人の居る気配はあるが普通の家と同じに静かなのである。すべり台やぶらんこも目立つほどではない。住宅地の中にすっぽり埋もれてしまって見つからないのも無理はない。

それでも何とかたずねあてて白い小さな札にThe Spinney Infant School とある門前にたどりついた。附属にナースリースクールもあるのでそちらを主に見せてもらった。場所はエセックス州のハーロウという静な住宅地である。ロンドンとケンブリッジの間にあり知的レベルの高い人たちの多い新しい町だというのが、広い道で芝生が美しく、さっぱりと小じんまりした家の多いありふれた住宅街の中であった。

我々が入ってゆくと物珍しげにあちこちから話しかけて近よってくる子どもに会う。建物は大部分が一階でトイレや帽子掛けなど共通の場所を中心に各保育室が配置されている。廊下に向かって教室がならぶ日本の場合とまるでちがう普通の家庭を少し大きくしたようなものだ。各保育室の外に面したところは出入口となり、外はテラスで屋根が簡単についているが、その先は広い芝生の園庭のゆるい起伏に続いている。

3才ぐらいからの子ども達は登園するとすぐ帽子や荷物をおいて室内の外で勝手に遊んでいる。先生は子ども達を迎えて一人一人に言葉をかけるが室内で自分の椅子に坐ったままだ。何も世話をやかない。履物は外も内も同じですむから靴を脱ぐことはなく身仕度も簡単だ。保育室のまん中でベビーカーに本物の赤ちゃんが眠っている。当番の母親がつれて来ているのだ。母親は一人ずつ交代で一日中助手として保育を手伝い、その中で子どもの教育について体験をとおして学ぶのだそうだ。この赤ちゃんの母は

最初先生かと思っただけくらい馴れた調子で全体の子どもの遊びに目を行届かせているのである。子どもは赤ちゃん連れの母親助手には馴れていて泣き出せば知らせにゆき、母はミルクやおむつの世話をするとそのまま他の子どもたちの方へ行ってしまう。赤ちゃんは子どもを見ておとなしい。何ヶ月かときいたら6ヶ月の女の子でマリアヌと言うのだと子どもたちが教えてくれた。みんな可愛くて人なつっこい。

この部屋にはざっと20人くらいで4才が主だが3才児もまじる。インファントスクールの入学は5才の誕生日を含む学期の始めであるから4才の後半になると学期始めにナースリイからぬけてゆく。卒園の儀式もない。空いたところへ又新しく保育の必要な子が入ってくるのだそうだ。必要度の順に入園を許されるので現在でも希望者が多数待たされている模様である。

保育室の中は小さな区切りにしていろいろの遊びが出来るように工夫されていた。真中に本棚や用品入れなどを置いて四つくらいの小部屋風に仕切れ遊びのコーナーが出来ている。周囲の壁は物を飾ったり掲示したりそれぞれの遊びに従って工夫されている。この他に別室が付いていてカーテンで仕切った中はカーペットが敷かれベッド(本物のベビーベッド)には大きな人形がねえたり別の一隅には子ども用の椅子とテーブルが置かれ台所道具がそろっていたりする。遊び道具と言えないくらいどれもこれも精巧に普通の生活をそのまま少し小さくしただけの本物である。子どもたちはカーペットにねころんだり坐ったり、ベッドでねたり、この部屋は靴をぬいで遊んでいるが椅子には腰かけるだけで絶対にのぼらない。生活様式のちがいだろうか。絵本のコーナーでは3.4人かたまってテーブルをかこんでいる。工作の部屋には子ども用の工作台が万力までついて居り、抽出しには大工道具や釘など、台の下の箱には木片のがらくたがいっぱい入っていた。何人か女の子

もまじえ盛んにトントンやっている。すぐ隣は水と流しがあって絵の具やイーゼル、紙や糊などが出ていたが子どもは立ち去ったあとだった。台の上に作りかけの粘土、隅に空きかんやびんのふた、プラスチックの容器など工作材料になる品々が分けられた箱に山のように入っていた。子どもが何人かセロテープで空き箱をつないで何か作っている。



この遊びの中で先生と助手は目立つ動きは何もしていない。話しかけてくる子どもの相手をして呼ばれたグループのところへ行っただけの様子だ。助手は先生の目の届かぬ所へ立ちまわっているが、いずれも一対一の個別指導に終始している。子どももそれぞれ別の遊びを楽しそうにおだやかに展開していて先生の存在など用事がなければ忘れてしまうような様子である。普通の家庭での遊びの延長のようで、みんな一緒に活動は殆んど見られなかった。

ナースリイは二部制で午前は12時で終わる。30分くらい前になるとクリヤータイム(片付けの時間)になる。大人は掃除をし子どもは使ったものを元の場所にもどす。小コーナー毎に設置された道具だから簡単に片付いてしまう。ここでやっと全員身仕度をし集まって先生の話をきいて歌をうたっていた。お迎えが来て連れて帰る子、お迎えを待って外で遊ぶ子など、それも一人二人と帰ってやがてみんな居なくなってしまった。子どもを迎えにくる人たちは多様

である。母親が多いのは当然だが老婦人も見えるし髭の男の人もある。2、3人まとめて連れ帰る人もある。身なりから察して決して豊かな人達ではない。皆同じように子どもを呼びよせて先生に言葉をかけて帰ってゆく。先生は始終笑顔でうなずいているだけ、全員が居なくなるとさっと自分の職員室へ引き上げる。午後は1時から始まるのだ。

子どもの中へ入り共に活動する日本流の保育と少々勝手がちがいで私達はとまどったけれども、全員を一人一人静かに自由に活動させている行き届いた配慮には教えられる点が非常に多く、子どもを扱う重み、ひいては人間一人一人の重みが部厚い文化の質を思わずにはいられなかったのである。 (助 教 授)

oooooooooooooooooooooooooooooooooooo

幸福感について

2年 蓬 田 美 紀

もう何年も前に読んだ太宰治の小説『斜陽』の中に、「幸福感とは、悲哀の川の底に沈んで幽かに光っている砂金のようなもの。悲しみの限りを通り過ぎて、不思議な薄明りの気持ち」と幸福感について著わしたことが妙に心に残って、今でも時々フッと頭に浮かぶことがある。人にはそれぞれの生き方があり、幸せの感じ方もあるが、私にはこの太宰治のような感じ方がとても淋しく思われる。というも、太宰の幸福感が暗く、苦しい生活の底から生まれたもので陰的なものとするのに比べ、私の幸福感は何ひとつ不自由のない明るい日の下で生まれた陽的なものであるからだ。

今まで、毎日の平穏な生活がまるで当たり前のように感じられ、ついぞ幸福を意識した事がなかった私に、ひとつの目標ができた時、この幸福を感じる事ができるようになったのだ。それは、保母になろうと決心し、この短大に入ったことがきっかけとなった。

高校を卒業し、一度はある企業に就職したものの毎日同じ仕事を繰り返す、何の生き甲斐も見い出せない職場で、ただめくめくと安易に暮している事が果たしてほんとうの幸せなんだろうか……と自分に問い質した時、それまで胸の中に温めていて、捨て切れないでいた夢が私の目の前に甦った。そして一から出直しのつもりで、上田女子短期大学の門をくぐったのだ。それから、私には目標ができた。まず保母になる。そして次にはよりよい保母になるため実践を積み重ねる。という大きな目標が。今、好きな道で、好きな事に向かって何不自由なくのびのびと生きているのだ。

しかし、よく幸福感というのは、それを求めて追っている時が一番幸せで、手にしてしまうと「なんだ、こんなものか」と意外につまらなく思えるという。私の今の幸福感も、目標に向かってただつき進んでいるという点でこれに似ている。しかし私にとってそれと大きく違うところは、最初の目標を手にしても、次には「よりよい保母になる」という更に大きな目標が残っており、これはどんなに踏み固めていっても、これでよいという限度はなく、果てしなく続いているという点である。言い替えば、私の幸福感は、際限なくどこまでも続いているということになるのではないだろうか。

今、この短大の生活において、創作舞踊、オペレッタ、卒業研究、就職と、目の回る程の毎日の忙しさの中で、大きな充実感とともに「ああ、私は幸せだ」とつくづく感じる事ができる。私の20年余の人生で今初めて、そして最も強く幸福を感じているのだ。

これからの人生においても私は、太宰治のような淋しい幸福感をかみしめたくない。いつも明るい日の下で、にこやかに笑える幸福を感じたいものである。

長井先生の思い出と「赤い鳥」

天 田 邦 子



やわらかい日ざしの晩秋の午後、別所線の大学前の小さなホームで、電車を待ちながらお話しをうかがったのは、数年前のことになります。その日、上田市街のバス停留所でお別れするまで、私の若い好奇心にこたえ、パールバックのこと、英語教育のこと、短大のこと、学生のこと、そして御自身のことを話してくださいました。初めて親しく話しを交わしたその日から、ことしの春までさまざまな思い出を私どもに残して、先生は世を去られました。

上田女子短期大学創立の頃から教鞭をとられた長井先生は、その前にも高校で教えられ、職場の大先輩、また職業婦人の先輩、教育者の先輩であられました。広報部や厚生学寮、教授会議長などの学務を担われ、広い視野と豊かな経験に裏打ちされた、情熱のこもった対応のしかたに、「遅れてきた」私たちは大いに教えられたものです。会食の場や同乗した自動車のなか廊下での立ち話しなど、さりげないところで示唆に富んだ御意見をうかがったのが心に残っています。

長井先生は、人間的な大きさを感じさせました。明治の末ごろおうまれになり、大正、昭和と日本の近代史にそって力強く歩まれた方でし

た。先生は、御自分でも日ごろの健康を自負されていましたが、周囲にいる私どもにまで、元氣と陽気の気分を傾けてくれるほどの、尽きないエネルギーを心身両面で備えていらっしやうたようです。悲観や失望に陥らず、前をみつめてすばやく問題を捉える姿勢を、しばしばお示しになりました。回転のはやい思考、あたたかい配慮、さわやかな弁舌、またユーモアとウィットがいつも先生とともにありました。いつでしたか、先生の母校東京女子大学や学長、安井てつ氏の話しをうかがいました。成長期を東京において、いわゆる「大正デモクラシー」の洗礼を受けて過ごされ、個性と人格を尊ぶ学風、自由で進取的な学風のなかで培われてきたお人柄が、その後の先生の足跡や日ごろの言動ににじみ出てくるものかと、ひそかに思ったこともありました。

御専門の英語教育に関しては、短大における教育はもちろん、英語検定の委員なども務められ御活躍していました。これもいつでしたか、英語を使いこなすには、ゆたかで美しい日本語ひいてはゆたかな人間的経験や情感をもつことが必須だと指摘されたことが印象的でした。

短大では、教育課程の一環として2年生に卒業研究を課しています。児童文学や文化財に関心を寄せている学生たちにとって、長井先生は最適の指導者であられました。アンデルセン、グリム、宮沢賢二、新美南吉など内外の童話研究の成果は、『幼児教育研究』誌にも収録されています。保育上の実践的志向が強い本学のなかで、児童文化財や人間の生き方にかかれる文学を追求していく先生のお立場は、実に貴重な位置を占めていたと思われるなりません。

このたび長井先生の御遺族から、児童文学関係図書を充実することに使ってほしいと、御志を届けていただきました。そこで、拝受した御志を基金とし、長井先生の御冥福を祈り、御遺徳をしのいで、図書館に復刻版『赤い鳥』を全

号備えることになりました。

『赤い鳥』は周知のように、デモクラシーと児童愛育の風潮を背景に、大正7年(1918)鈴木三重吉が創刊したものです。鈴木は「世間に行なわれている少年少女読物の大部分は、その俗悪な表紙を見たばかりでも、決して子どもに買って与える気にはなれません」と、そのころの子ども向け読み物を批判し、それらを「排除して、彼等の純真な感情を保全開発するために現代第一流の作家、詩人、作曲家の誠実な努力を集め、兼て子供のための真価ある若き作家音楽家の出現を迎える最初の一大画期的運動を」とうたって、『赤い鳥』を発刊したのです。

そこから「杜子春」「くもの糸」(芥川龍之助)「一房の葡萄」(有島武郎)「実さんの胡弓」(佐藤春夫)「からたちの花」(北原白秋)「うたを忘れたカナリヤ」(西条八十)など、今日も知られている数かずの作品が生まれ、坪田譲治や平塚武二らの新しい作家が育ち、毎号紙面を飾った白秋や八十の童謡によって、童謡の全盛時代をもたらしました。その童心主義の立場は、今日的にみれば限界も指摘されているものの、在来の子ども読みものを文学の地位にまで引きあげた功績は大きく、さらに島崎藤村監修『金の船』や千葉省三編『童話』など類似雑誌の刊行にも影響を及ぼしました。

いわば「児童文化のルネッサンス」の最初の烽火の役割を果たした『赤い鳥』も、昭和11年には廃刊に至ります。今回、図書館に備えられるのは、その間の全号です。長井先生を記念するこの雑誌を、私たちは大いに利用し、先生の御遺志をくみながら、児童文化の未来を考え、学び続けていきたいと思ひます。(講師)



ある本との出会い

2年 湯本 かおる

私が1年の頃、知人が私に一冊の本を貸してくれた。新潮文庫本で、だいぶ古いものらしく定価が100円で、もうすすけたように黄色くなっていた。『青年の思索のために』という、またずいぶんむずかしそうな本だなあ、と思いつつ読み始めたのを覚えている。

読んでいくうちに、うまくは言えないが、自分の心にしんしんと伝わってくるものがあつた。作者は、下村湖人、『次郎物語』などを書いた人で、幼年時代から愛に飢えた悲痛な体験をしてきた人のようだ。

ここで、作者が私達青年に送ることばとして“高く飛べ、まっすぐに飛べ、ゆっくり飛べ、”という、ある飛行家が長距離飛行の秘訣として常に使っていたということばを書いている。人生の大飛行に出発しようとしている私達には、夢や希望がある。およそ一生の理想とか、目的とかいうものは、それが高ければ高い程、その達成が困難であり、従って精神的に苦しみ時には絶望をいだいてしまうことさえあるものだ。しかし、目標を小刻みに定めると大きかった前途の不安がすこし軽くなることがある。それで小さな希望が湧いてきて少しずつ前進することが出来るものだと思う。そして、前進した分はその人の成功であり、それが次への前進の糧となると思う。誰かのことばに、「人生は散歩のようなものだ」というのがある。これは一見、人生をばかにしたようなことばだが、散歩というのは、一步一步に大きな意味があり、同様に人生も現在の一瞬一瞬、一日一日が大切でそれをいかに充実させて生きるかが重要だと思う。一日一日では、それ程代わり映えしなくても、長い目で見れば、懸命に生きている人と、ポニーとしている人では、青春の価値には当然のこ

とながら差が出てくるものである。こんな偉そうな事を言っている私が、毎日これを念頭において、生活しているわけではない。けれど自分の心の隅にはほんのちょっとでもこういう考えを持っていれば、その人にとってプラスになる何かがありはするはずだと思う。この本を読んだから、自分のこれからの毎日に、すこし明りがさして来たような気がした。人の一生というもの、様々である。けれど、人生の先輩として私たち青年の為に書き残されたことばは、ほんのすこしだが、生き方の基本を教えてくれたようだ。

今、この本は、私のものになってしまっている。どうしても欲しくて、知人に頼み込み、というよりは半強制的に私のものにしてしまった。古い本だし、書店にもないだろうと思ったら、なんだか私だけいいものを持っているような気になり、今、改めて知人に感謝をしている。

「兎の眼」と私

昭和50年度卒業 川俣よし子

「私、最近こんな本を読んだのだけ」と童話作家をめざす友人から、灰谷健次郎作『兎の眼』を紹介されたのは、もう2年も前のことです。その時、「川俣さんも好きになる作家の一人だよ」と友人にいわれたのを、妙に気にしながら、今年の始めになってようやく『兎の眼』の本を自分のものとしました。

涙と笑いと腹だたしさのなかで読了して、まずうれしく思いました。それは、障害児教育や統合教育をめぐるテーマが、今まで文学、特に児童文学の分野には少なく、この語られざる未踏のテーマを作者が情熱をこめて描いていたからです。児童文学は、子どもからおとなに至るまで幅広い層をまきこんで語りつがれ、読まれていくものです。鉄三（主人公のハエに興味をもつ少年）のことや、小谷先生、バクじいさん

仲間たちの生活の連帯が、多くの人々の心にはいりこんでいくことを考えると、喜ばしい気持ちがかみあげてきました。

同時に、多少のもの足りなさも感じました。これは、私の生き方に関係しますが、差別のことや、障害児者問題に関して、多くの人と出会い、本を読み、また直接現場で働いてきた経験に照らして『兎の眼』をみれば、ちょっともの足りないなという気がしないでもありません。

しかし、この本はその種の専門書ではないしあくまで創作をとおして人間性や人間社会の真実に迫る児童文学の作品なので、わかりやすく、さらりと流しているようにみえて、本質的な問題を私たちに提起しているところにこそ、この本の良さがあると思います。

灰谷さんの作品『太陽の子』にも、大変感動しました。こうして灰谷さんは、友人の予言どおり私の好きな作家の一人になりました。

私は、1976年の春、上田女子短大を卒業し、障害者問題の社会におけるあり方を模索してきました。今は、社会福祉法人瑞穂会設立発起人会の一発起人として、障害をもつ子も、もたない子も一緒に通える保育園、つまり統合保育実践の場をつくろうと、「こひつじ保育園」の建設をめざして奔走しています。保育園の建設予定地は、長野市中御所で、乳児から就学前の子ども90人が定員という計画です。

会では、社会福祉は行政や一部の人々にのみ委せるのではなく、思いを同じくする多勢の人々の手で実現してこそ、本当に温かな地域社会ができると考え、法人の設立と保育園の建設には市民一人ひとりが参加する市民運動として取りくんでいます。ことしの7月25日には、長野障害児保育を考える会が主催し、瑞穂会が協賛して「街をかたる講演コンサート」を開きました。講演者が灰谷健次郎さんで、会場の長野市民会館に集まった2000人の人々に混じり、ユーモアの中に鋭い指摘を交えたお話を聴きまし

た。

「兎の眼」の世界と瑞穂会の趣旨と共通していることは、幅広くより多くの人たちをまきこんでいきたいという願いです。瑞穂会は、賛助会員制をとり、現在 1205 名の方の賛助を受けています。今、従事しているこの運動をとおしてさらに学び考える努力を続けたいと思います。

昭和53年度利用状況

(館外貸し出し)

N. 分	D. 類	C 類	冊 数
000	総	記	50
100	哲学	宗教	42
200	歴史	地理	62
300	社会	科学	1270
400	自然	科学	160
500	工業	工学	73
600	産	業	3
700	芸	術	210
800	語	学	15
900	文	学	872
小 計			2757
児 童 書			648
楽 譜			85
紙 し ば い			36
雑 誌			93
小 計			862
合 計			3619冊 (2756人)

※入館者総数 36,516人(内学生 36,027人)

お 知 ら せ

(図書館の今後の予定)

新設図書館の完成予定が当初計画より早く、このため新図書館への引っ越しを来たる年末・年始休みを利用して行なう計画でいます。12月～1月の図書館は大体下記のように閉館しますので、御協力下さい。(卒研利用には別途考慮します。)

月 日	閉館期間	業務予定・その他		
12月15日(土)	開館	貸し出し全面停止		
17日(月)			貸し出し本回収	
21日(金)				(卒研発表会)
22日(土)	閉館	蔵書点検		
24日(月)			全蔵書の運び出し 引っ越し準備	
29日(土)				年末・年始休業
31日(月)				
7日(日)	書架等備品の運び込み。 (新規購入備品の納品)			
12日(土)		全蔵書の運び込み及び 配列・配架		
14日(月)			19日(土)	
19日(土)	開館準備			
21日(月)		新図書館利用ガイダンス 開館		
24日(木)				

工事の都合により、上記予定は多少変更になる場合がありますが、早くも1月21日(月)、遅くとも1月24日(木)頃には開館出来るようにしたい方針でいます。

寄 贈 図 書

—— 54 年度主な寄贈 ——

・ 自閉の世界 (玉井収介) 他「自閉症」関係 5 冊	ヨ日本文化科学社	本学元講師 石橋和子氏寄贈
・ 手さぐり信仰入門 (清水恵三)	日本 Y M C A	須永淑先生 "
・ 辺境の教会 (清水恵三)	日本基督教団出版局	" "
・ 子どもの自殺 (大原健士郎)	朱鷺書房	天田邦子先生 "
・ 教育学を学ぶ (柴田義松外)	有斐閣	" "
・ 法律家の見た「新しい中国」(日中友好法律家訪中団)	日中友好法律家訪中団	本学理事 荒井金雄氏 "
・ 汗と涙とはほえみと (「防衛アンテナ」編集室)	防衛弘済会	防衛弘済会 "
・ スモン訴訟の真相 (高橋秀臣)	行政通信社	行政通信社 "
・ 長野県史、近世史料編 第二巻 (二) 東信地方	長野県史刊行会	長野県教育委員会 "
・ 明治大正見聞史 (生方敏郎)	中央公論社	日本図書館協会 "
・ 郷土の歴史、城下町上田 (上田市立博物館)	上田市立博物館	上田市立博物館 "
・ ロシア絵画の巨匠、レーピン名作展	月光荘	日本図書館協会 "
・ ロシア美術館名作展 (中村曜子)	月光荘	" "
・ 講座現代の人間学 7 (ガーダマー・フォークラー)	白水社	本学元講師 石橋和子氏 "
・ 兎の眼 (灰谷健次郎)	理論社	犬飼己紀子先生 "
・ 郷土の歴史、原始・古代文化 (上田市立博物館)	上田市立博物館	上田市立博物館 "
・ 郷土の古文書 (上田市立博物館)	"	" "
・ 坂城の宿場と遊廓 (中沢勇)	信毎書籍	坂城町 中沢勇氏 "
・ しおだ町報 縮刷版 (塩田町復刻刊行会)	信毎書籍	上田市塩田町公民館 "
・ 坂城町誌 上巻 (坂城町誌刊行会)	坂城町誌刊行会	坂城町誌刊行会 "
・ 長野県教育史 1 巻・13 巻 (長野県教育史刊行会)	長野県教育史刊行会	長野県教育委員会 "
・ 小麦粉の話 (製粉振興会)	製粉振興会	製粉振興会 "
・ In The Spirit Of Enterprise (Gregory. B. Stone)	W. H. Freeman and Company	ロレックス時計社 "
・ オラフの剣 (フランク・ナイト) 他絵本 4 冊	篠崎書林	篠崎書林 "

編 集 後 記

今年度は図書館にとって特別な意義深い年となる。新築の図書館の工事は窓外で日々進んでいるのが見える。私どもはこれに伴って学内の教育の充実と研究活動への意欲を燃やすのである。図書館だよりも年を追って内容が盛上って、本年は学内外より多数の方々から御寄稿をいただ

き、活気溢れる充実したものにすることが出来た。これをひとつの足がかりとして多くの人達が図書館活動への理解と協力のもとにここに集まり、教育の使命達成への道を歩むことを祈って編集を終わる。(須永)